

身体観と体育 — ヘレニズムとヘブライズムを中心に —

The View of the Human Body and Physical Education: With a Focus on Hellenism and Hebraism

金 玉泰 KIM, Oktae

● 西原大学校
Seowon University



ヘレニズム, ヘブライズム, 身体観, 心身二元論, 心身一元論

Hellenism, Hebraism, views of the human body, dualism, monism

ABSTRACT

本稿は、関連文献を通じて西洋文化の底流を成し遂げる二大思想のヘレニズムとヘブライズムの身体観について考察し、現代体育での意義的な面で照明したものである。先にヘレニズムとヘブライズムの特徴と関係に対して論じ、プラトンとアリストテレスなどギリシャの哲学者たちは、心身を別の実体と考え、体より心を重視する心身二元論的な身体観を所有していたのに反して、新旧約聖書に現れる人間的用語を中心と見なすヘブライズムの身体観では、心身を分離不可能な一元論的な身体観という結論に至った。これはきらびやかだった体育の歴史を誇るヘレニズムに比べて極めてまればだったヘブライズムの身体観が『身体活動を通じる人間教育』という今日の体育の意義をよく反映し、現代体育の指標になっているということを示した。

The purpose of this paper is to consider the view of the human body in Hellenism and Hebraism, the two prominent thoughts of western culture, through literature, and to explore their meaning in modern physical education. Such Greek philosophers as Plato, Aristotle, thought that mind and body were two different things, and possessed a dualism that was more concerned with the mind than the body. However, the view of the body in Hebraism, centered on humanity in the Old and New Testaments represents monistic thought that can not separate body and mind. It reflects properly the significance of modern physical education which is human education through physical activities. Thought about the body in Hebraism did not develop in sport history though the corporeal thought of Hellenism richly developed, and became the main indicator in modern physical education.

1. はじめに

体育において身体の意味を理解するのは、大変重要なことであり、身体的意味を把握する時人間の構造的な概念を問題とする領域を、必然的・本質的に考察しなければならないであろう。

カント (Kant) が提起した哲学的人間学は、後に西洋哲学の中心的思潮となったが、これと同じように『体育とは何か』『体育の意義』は、体育学の究極的な課題であり、それは『人間とは何か』という疑問に対して絶えず表裏を共にしている。すなわち、体育は人間の尊厳性を自覚し、人間尊重を基盤とし成立する人間科学であるためである。そういう意味において、川村 (1974: 209) が「体育の目的は人間だ」と結論付け、また続けて「人間を離れた身体はなく、身体を抜いた人間はない」といったことは十分にうなづくことができる。また、篠田 (1973: 84) は「体育の対象は人間でその身体だ。体育が身体を別に離して考えることはできない科学ということは明白だ」と語った。

人間において心身概念に対する最初の分離は、B.C. 500年頃、身体から魂を分離させたヘラクレス (Heraclitus) から始まった。そして中世においてはデカルト (Descartes) によりまた復活した。近頃では、心理学者フロイト (Freud) の影響でこのような人間本性に対する二元論の概念が広まっている (Rappaport, 1975)。

心身概念が一元論か、あるいは二元論かによって、人間が追求するあらゆる分野での目的が大きく変わることになる。特に身体活動を主な関心事とする体育においては、より一層大きな影響を受けることになる。すなわち、心身一元論では精神と身体の発達を一つの有機的関係で説明するが、心身二元論では身体的発達だけを主とした体育の姿が形成されなければならないためである。

ところで、西洋文化の土台となる二大思想のヘレニズム (Hellenism) とヘブライズム (Hebraism) には、非常に対称的な特徴がある。ギリシャ人は、その思考の特徴が論理的・空間的・自然的・静的・循環的であるのに対し、ユダヤ人の思考は、

心理的・時間的・歴史的・力動的・直線的といえる (Jang, 1983)。特に、体育の目的を決定付ける身体観においても大きな差が現れる。本研究では、関連文献を通じてヘレニズムとヘブライズムそれぞれの身体観について考察・比較して現代体育での意義的な面で照明しようと思う。

2. ヘレニズムとヘブライズム

ヘレニズムは、古代・中世を経て近世・現代に至るまで、今日の西洋哲学、科学、文学、芸術、政治、体育などの領域において、その根源になっており、合理主義的・世俗的人間中心思想を意味する。古代ギリシャ人はプラトン (Platon)、アリストテレス (Aristoteles) などの思想家らを通じて、合理主義・平等主義・自由主義の根拠になる基礎理念を伝授した。そして、人間個体の重要性和外的・政治的自由の精神を継承した。彼らの古典によると、人間は誰でも理性を持って生まれたので、平等であり、社会で起きたすべての問題は、彼らが自ら解決できる自律的な存在とした。

ギリシャの思想は、B.C. 4世紀を最後に創造性を喪失し、倫理・宗教の時代に入ると、自らどのように暮らさなければならないかという魂の救済問題を追求することになるが、その以前からギリシャ人の胸中に潜在していた身体をさげすむ思想が次第に顕在化されることになる。それは『身体は魂の監獄』とか『身体は精神の墓』という考えである。このような身体観がピタゴラス (Pythagoras) 派に伝えられ、プラトンははじめとしたギリシャ哲学者らに影響を与え心身二元論思想が出現するようになったのである (水野忠文外, 1973: 27)。

人間性の自由な発露に基礎を置いた現実的・合理的性格を持ったギリシャ精神のヘレニズムは、後にローマに政治的には征服され支配されたが、思想的・文化的にはローマを支配して、ローマが滅亡し中世に入りヘレニズム思想は中世思想史の根源を成し遂げることとなる。特に、体育史的面にもその与えた影響は、大きいと言わざるをえず、身体的な面において重要な禁欲主義を現すように

なったのである (Kim & Hwang, 1993)。

それに対してヘブライズムとは、唯一神エホバ (Jehovah) を信じる超越的で宗教的神中心思想を意味する。ヘブライ人は経典 (聖書) を通じて早くから神人契約思想、予定論、選民思想、終末思想などの理念を伝授し、人間個体の重要性和内面的・道徳的自由の精神を受け継いだ。聖書によると、人間は『神様の形状』のままに生まれた神の子であるので、善悪を分別する能力を持つと同時に神様の命令に従順しなければならない存在である。

ヘブライズムは西洋文化の中でもその中核といえ、これはユダヤ教を母胎で形成されたキリスト教が、ローマ帝国によって育成され中世を経て近世・現代に至るまで西洋人の精神的支柱となる思想であった。このヘブライズムは、狭い意味においてはユダヤ民族がパレスチナに住んでいた時代の宗教思想で唯一の全能の神との仲裁者のモーセの十誡を道徳律とする。特徴はメシア (Messiah, 救世主) 思想、すなわち選民のユダヤ民族をローマ帝国下で救援し、この世界を治めるメシアが彼の民族の中から現れるという思想である。広い意味では、西洋文化の2大源泉の一つとして、イエスの誕生により形成されたキリスト精神がそれである (Jung, 1990: 22; Kim & Hwang, 1993)。

このようなヘブライ人の宗教思想を土台に、イエス キリスト誕生以後はじめて、西洋思想に貢献したヘブライズムは、彼ら自らの独自の思想を構築したというよりは、ヘレニズムとユダヤ教およびローマ帝国主義から哲学、宗教、政治、体育などから直接又は間接的に影響を受けることとなった。例えば、ローマ帝国下でキリスト教がその場を固めている時、ギリシャ文化と思想はキリスト教に多くの影響を与えた。

事実、ユダヤ教のギリシャ世界との文化的接触は、アレキサンダーのオリエント征服以前からすでにあった。神学文献によると、アンティオコス4世時の葛藤状況を見る時だけでも、ヘレニズムとユダヤ教は、互いに相反するかのように見える。しかし、ユダヤ教初期には、ヘレニズムを排斥したというそのような証拠はない。政治的にも葛藤

要素はなく、ギリシアの支配者もバルシア末期の現象を尊重していた (Han, 2003)。

このような枠組みの中で、ヘレニズムとユダヤ教の宗教-文化的要素は、互いに対立的要素として作用した。ギリシャの祭儀制度と皇帝崇拝は、ユダヤ人には明らかに偶像崇拝に見えた。これは、後期の葛藤の状況理解のための重要な前提である。ユダヤ地域は、広範囲な変化が起きる周辺地域から若干離れていた。葛藤状況に移る過程は、非常に遅い速度での展開であった。

ヘレニズムという外勢の威嚇に直面して、ユダヤ人は伝統的信仰と自分たちのアイデンティティを保持しようとした。したがって、伝統的な祭儀制度をもう一度強化させた。何よりも、トーラー (Torah) に基づいた敬虔の重要性が大きく強調された。また、聖歌隊のような新しい礼拝活動も生じた。それによって、詩篇がより多様で豊富に発展し、これを日常的な礼拝で歌によって具現した。このような精神化過程をレビ人が主に担当した。その結果、レビ人の地位と名誉は一層さらに高まった。それと共に、祭司長等とレビ人の間の葛藤による社会的緊張がかなり解消された。

Han (2003) によると、社会的差別の撤廃を理想としたヘレニズムの主張は、新約聖書のパウロ (St. Paul) からその完成された姿を見ることができる。パウロは、ヘレニズムの理想がイエスキリストの中で完成されたとした。パウロは、これまでユダヤ教で通用していた政治的・社会的・文化のおよび宗教的特権が廃棄された新しいキリスト教の秩序を主張した。パウロが主張する変化と新しい秩序および社会正義を、「ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです」(ガラテヤ人の手紙, 3:28) で見ることができる。

また「…エピクロス派やストア派の幾人かの哲学者もパウロと討論したが、…」(使徒行伝 17:18) と記録されたように、初代教会時期にローマ帝国内に流行した有力な思想のストア哲学 (Stoicism) は、ギリシャ的ローマ時代の厭世観を反映する思想であり、人間は社会の一般的慣習や

通俗的な幸福観に従ってはいは善良な生活を成し遂げることができないという信念を独特の方法で表明した。特にこのストア哲学は、厳格な禁欲主義、ロゴス論、万人同等主義、万人兄弟思想としてキリスト教神学に大きな影響を与えた (Son, 1986 : 48)。

結局、西洋の歴史において二大思想となるヘブライズムとヘレニズムは、それぞれの属性の精神と物質、信仰と理性、宗教と哲学、宗教と経済の間において敵対的葛藤と対立の他に相互的融合と協力の過程を通じて続いてきたという主張もあるが、根本的な面において大きな差は無視できず、次の章での身体観にも現れていることである。

3. ギリシャ哲学者達の身体観

古代ギリシャ哲学者達の身体観が統一されたヘレニズムの身体観というにはもちろん問題があるだろうが、この章ではギリシャ哲学者達の中で身体観に対して明らかな主張をしたプラトンとアリストテレスを中心に考察しようと思う。

3.1 プラトンの身体観

プラトンは形而上学的二元論者である。彼は存在の階層を感覚器官の対象となる事物界、すなわち変化する時空の中の現象界の可視世界と、純粹理性の対象となる数理・形象の観念界、すなわち不変する本体界の可思世界とに分けた。すなわち、プラトンは感覚器官界を否定し、思惟界の価値だけを認め、極端に人間の身体(感覚器官界)は魂(思惟界)の監獄であるとまで表現した。言い換えれば、理性によるアイデアの世界に対する認識だけが真の知識であり、変化する現象世界に対する感性的な知覚は、臆見としての価値がないのである。つまり、消滅する身体と不滅の精神との間を正確に区分しながら、精神が身体の影響から抜け出して自由になることを理想とした。

しかし、肉体と緊密に関係する体育を非常に強調した。このような事実は、彼が舞踊・遊戯・レスリング・運動競技・狩猟・ボクシング・レジャー生活などに関して言及した内容を通じて知

ることが出来る。このように体育を強調した理由は、身体運動を身体の発達と魂を助けるための手段として、すなわち身体と精神が互いに調和を作り出して、彼自身が描く理想国家内の民主市民として素養を整えるために重要視したものである。

プラトンは、人間をからだと魂で二元化させ、精神的なことは肉体的なことより優れ、人間の身体は精神より劣等な存在と認識活動をすることができないとした (Jung, 1990)。さらに、「優れた肉体が精神を改造することは出来ないが、優れた精神は肉体を改造することができる」とする彼の精神優位の思想を表れしている。これは体育思想史的源泉において、すでにソクラテス (Socrates) が「精神は身体の主で、身体は精神の従者だ」と言った身体観でも明らかとなり、彼から続くプラトンの唯心論的人間把握の一面が現わされたと言える (Lee, 1985 : 126)。

Lee & Hwang (2009 : 88-94) によると、当時ギリシャでは身体を現わす言葉として『ソーマー (σωμα)』という言葉があったが、その意は『内側を保護する空間概念』『魂の模型』『死骸』『死体』『生きているからだ』などと使われた。したがってプラトンは当時ソーマーに対する意味を整理して、彼のアイデア論を根拠とした身体の意味を表明した。すなわち人間は窮極的にアイデアを認識するものであり、このアイデアを認識するためには魂が浄化されることを望む。身体は魂がアイデアを認識できるようにその踏み石 (stepping-stone) になるようにしたというのである。

このような身体の意味は、彼の体育思想に影響を及ぼした。魂をしっかりと保護するためには強健な身体が要求され、魂がアイデアを認識することにおいて身体が立派な踏み石になるためには、身体の本能的性質、すなわち身体の中の物質、植物・動物の諸要所の絶え間ない鍛練を通じて、秩序正しくて統制された身体を要求するとした。

またプラトンの他の身体に対する見解は、当時密議的宗教であるオルフェウス (Orpheus) 教的身体の意味がある。オルフェウス教は、いつかは死ぬはずである肉体の束縛から抜け出して、人間の魂が霊的存在として不死と永遠の幸福を得ると

いう基本宗旨の特徴をもつ宗教でプラトンに大きな影響を与えた。プラトンはこのオルフェウス教的身体の意味を受け入れ『人間的な罪悪を起こす悪の源泉』『魂の墓』『魂の監獄』等、身体に対して考えたものである。

このようなプラトンの身体観は西洋思想に大きく影響を及ぼし、靈魂不滅と自尊性の教理、身体と関連する全てのものに対するストイック態度、そして性を身体的情欲の罪とするこれらのことは、プラトンのこのような身体思想を根源にしたものと考えられる。更に中世以後体育史における身体軽視または、身体賤視思想は体育の発展に大きな阻害要因となったのである。

結局、プラトンの身体観はイデアの意味とオルフェウス教的意味とで要約することができるが、彼はもちろん各種身体運動に対する重要性をも説明したといえる。しかし精神優位の心身二元論的な彼の身体観は、心身一元論を標榜する今日の体育の意味とは全く合わない思想であると言わざるをえない。

3.2 アリストテレスの身体観

アリストテレスは彼が著述した弁論術と倫理学で幸福を定義しながら、身体に対する記述をもした。彼はプラトンのように身体を魂の監獄とは見なさず、幸福を追求する自分目的実現の手段と見た。すなわち人間の魂は身体の形状だと考えることである。また、彼はおかげ (Arete) を幸福の必要充分条件と見なし、魂と身体は内的なおかげ、そして血統や友人、財産などは外的なおかげとして分けた (Kim, 1982)。

アリストテレスは、人間のからだは有機的に組織されているとみて、身体と魂を各々分離してみた時は身体と魂とに分かれるが、これらは一つであり統合された時は人間と称するというのである。そして人間も質料と形相で構成されていると見た。形相は肉と骨およびこのような質料の部分の中で発見され、人間の肉と骨は人間を構成している材料ということが出来る。これを指し示す用語には身体、肉体などの概念があるが、これらが人間において質料である。このような質料の中に

内在的なものがまさに魂や理性などと同じことであり、これを形相という。

身体は質料、魂は形状であるので、人間の行為というものは身体を質料とした魂の活動というのである。したがって、人の行為は目的論的なものであり、精神の目的の努力は順次次元を高めていき窮極の目標は最高善であり、この最高善はプラトンのように超越的なイデア界にあるのではなく、現象界で得ることができるというのである。

アリストテレスは身体は生きているため、意識の驚くべき才能によって物質的対象と見ることはなかった。身体は魂と一緒に生命を形成する根拠地だとし、身体も道具だがそれは人工的な道具ではなく、自然的な機関としての身体と説明した。このようにアリストテレスが把握した身体の意味においては、生きていることの質料であり生命を保護する根拠地といえる。

それならば質料としての人間の身体はいかなる役割をするのか。アリストテレスはからだは単純な質料でなく有機的に組織されたからだだと述べた。からだの構造は操縦できるようになっており、この特性は身を処して使う魂と関係している。彼において身体と魂の関係は、木と机との関係のように生命が付与されることのなかった単純な質料と形相との関係でなく、形相によって動き成長をする、生きている質料というのである。

また、形相は人間のような生物体において完全に自分実現の原理で、漸進的な人生の計画であり、発展と目的の原理ということが出来る。しかし同じ人間の身体だとしても死んだ身体とは根本的に区別される。したがって、アリストテレスにおいての身体の意味というものは、有機体的質料であり、形相を通じて現実態での可能性を持った可能態である (Lee & Hwang, 2009: 233-234)。

アリストテレスは質料としての人間のからだを重視した。ここで意味する質料とは、単純に物的対象になるのではなく、魂を保護する根拠地で形相でもあり、進んで形相としての可能性を持った可能態と把握することができる。また、アリストテレスは人間のからだを単純に静的な対象とは見なさず持っている機能をも重要と考えて、からだ

がからだとしての機能を持つことができなければ、それは名前だけのからであって、それ以上の役割はないというオモニム (homonym) の見地ではからだの重要性を逆説的に強調している (Lee & Hwang, 2009: 238)。

アリストテレスはプラトンと違い身体を實在論的側面で解釈しており、人間の本性を現実的に完成させようとする点において高く評価されており (Kim, 1982)、また、彼は人間を質料と形相で区分しているが、論理的な意味で形相と質料、すなわち魂と身体とに区別したということであり実際には身体と魂は一つになるということを重視した一元論者ということもできる。だが、彼の思想の中には二元論が内在しており、彼は一般的な魂と精神を区別している。すなわち魂は人間と動物と植物などすべての生命を持った物体に存在するが、人間にだけの固有な能力は観照の能力である。人間は精神的に考え、判断し、認識する。精神は魂を通じてその姿が表現されるが、次元が異なる存在である。したがって、魂と連結された精神活動は、からだと一切を成し遂げる魂の活動とは対照をなすことになる。結局、身体と魂の一体性を主張する一元論の中に精神を身体や魂と対立させる新しい二元論の立場があることになる。

4. キリスト教聖書に現れた身体観

ヘブライズムとは、ユダヤ教を母胎として形成されたキリスト教が、ローマ帝国によって育成され、中世を経て近世・現代に至るまで西洋人の精神的支柱となった思想である。この章では、旧約聖書での身体観と、新約聖書の中で、特にパウロ書信に現れた身体観を中心に、ヘブライズムの身体観を考察してみようと思う。

4.1 旧約聖書の身体観

旧約聖書の人間の本質において一つの顕著な特性はその被造性にある。創世記1:26 (韓国語聖書) に「神様は言われた。私たちの形状について私たちの形のとおり私たちが人を作って…」となっている。ここで『形状と形』は初代教会の教

父らが『形状』は具体的に似ているものとして身体と関連するもので、『形』は抽象的な類似性として霊的で道徳的な本性であり、『形状』と『形』を別個の単語として取り扱ったが、これは聖書の一般的な例で、形状と形は相互融通性があるように使われる単語として (創世記5:1, 3)、厳密に区分することができない。したがって、これは類似の単語を繰り返し使うことによって、強調の効果を狙うヘブライ文学的表現として、すなわち人間の全人格が神様の品性と属性の影響下で作られたという事実を見ることができる (ジェジャウエン編, 1991: 331)。

特に、この被造性は創造主と被造物との間にある越えることのできない隔たりと人間はからだを有する聖書の創造の表現に使われたバラ (bara)¹⁾により見出すことができる。ところで、ここでの神様の被造物としての人間というのは、創造行為対象としての人間、すなわち神様の御前に立っている人間を意味する (Lee, 1984)。Eichrodt (1967: 160) は他の被造物と人間を区別しながら、「人間と天然界の中にある大きな隔たりは、人間は霊的で人格的という非常に深い固有の存在」として、「人間の人生に途方もない原動力が与えられ、これが偉大な目標に向かって前進をする」と指摘しながら、人間をすべての被造物の中心に置いた。

一方、旧約聖書での身体観はヘブライ人の身体観 (人間観) といえるが、ギリシャ人のように人間を二元論的に分離した考えがなかったため、身体に対する発達の概念を別に探すことができない。しかし、人間論的用語を通じて、間接的ではあるが身体に対して理解することができる。すなわち、Wolf (1974: 24-110) は旧約に現れた人間で『没落する人間』を *bāšār* (flesh, body)、『渴望する人間』を *nēpeš* (soul)、『全権を与えられた人間』を *rûaḥ* (spirit) として説明した。

旧約思想は、ギリシャ思想と違い、総合的・集合的でありまた肯定的であるので、全体を一つの言葉で表し『からだ』と定義をするような単語はない (Robinson, 1952: 13)。しかし、*bāšār* は70人訳聖書で、肉 (*σάρξ*, flesh)、あるいは、からだ (*σωμα*, body) と翻訳されているように、この肉と

からだは区別しないで (Kim & Hwang, 1993), た
びたび一部として全体を表現する代喩法の一種と
して使われている。この単語は, よく人称代名詞
を婉曲的に表現したりもする (Lee, 1984)。した
がって, この単語が必ずしも肉体と魂という二元
論を表現しているわけではないということが分か
る。

肉の基本的な意味は, まず人間と獣に共通の物
質的な肉を意味する (Jang, 1982: 93)。また, 肉は
からだと同じ意味で使われる事もでき, 又単純に
人間を意味する時が多い。イザヤ40:5「エホバ
の光栄が現れすべての肉体がそれを共に見るだろ
う…」で『肉体』という言葉は, 肉を示す言葉と
してよく使われる用法の人間を現わすために, 換
喩的に使われる言葉である (キリスト教大百科事
典編纂委員会, 1985: 128)。

聖書は人間を一つの統一体として描写する。旧
約聖書で魂, 心, また心臓という用語が言及され
る時, これは全人を描写していることである。し
たがって, ヘブライ的人間論において魂と肉体が
きわめて密接に連結された二重的な本質と言え
たとしても, これはオルフェウス教とプラトン主義
の特徴になる見解のように, 土で作った人に生命
とそして呼吸を与える神様の行為によって, 人間
の二つの分離した実体, すなわちからだと魂とで
成り立っているという見解は誤ったことといえる
(Kim & Hwang, 1993)。

ヘブライ人において, *nēpeš* は人間の姿全体
と人間の呼吸全体を網羅する表現とし, 人間は
nēpeš を持ったことがなく, 人間がすなわち *nēpeš*
であり, 人間は *nēpeš* として生きているというの
である。神様が人間を創造しながら人間に『生命
の生気』を吹き込んだ時, 魂という言葉が最初に
現れる。*nēpeš* は, 正確な二分法を要求する形而
上学的ギリシャ語が意味する霊ではない。

また, *rūach* という言葉が人間に適用される
時, 『呼吸』という意から『予言する霊』という
意に至るまで, 広範囲な意味を持っている。この
rūach は, 神様が与えるものである (ゼカリヤ書
12: 1)。それは, 人間の中にある生命の本源であ
り (ヨブ記27: 3), 神様がこの地の上にあるすべ

ての人間に与えるものである (イザヤ書42: 5)。
人が死ぬ時, この *rūach* は人間から離れる (ヨブ
記17: 1; 詩編31: 5; Baab, 1986: 80)。

結局, 旧約聖書に出てくる人間論的用語は, ヘ
レニズムの二元論と明らかな違いを表し, その本
質は一元的存在という結論に到達する。なお, 二
分説や三分説で語られることより一層包括的な意
味を含蓄することになる。すなわち, 分析的なヘ
レニズムとは違って, 総合的に事物を見るヘブラ
イズムの特徴により, これらの用語は, 本質的な
違いを意味するのではなく, 人間全体を多様に表
現しているということである。人間は肉であり,
霊であり, 自分自身でもあり, 感情と意志でもあ
り, 心でもある。つまり人間は色々な要素の全部
である。

しかし, 万が一人間をこのような色々な要素の
中で, ある一つ範疇と同一視しようとしたとして
も, 人間はそれらの中のどの一つでもなく, その
全部である。このような色々な要素は, 人間の本
質の多様な表現として認められている。この色々
な要素が相互依存的である時, その真の性格を持
ち出せるが, お互いが孤立している時は, 何の存
在意義をも発見することができない。

4.2 新約聖書の身体観

パウロは, 新約聖書の中の彼の書信で, 多様に
人間 (身体) について描写している。特に, パウ
ロの人間 (身体) に対する考察は, 新約聖書にお
いて最も重要視され評価されており, これは, 彼
の人格的経験から出た特徴的な結果と考えられ
る。そして, パウロも人間 (身体) を表現する時,
体 (*σωμα*, body), 肉 (*σάρξ*, flesh), 霊 (*πνεῦμα*,
spirit), 魂 (*ψυχή*, soul) 等の人間論的用語を使
ったが, この用語が人間のどの部分を述べているか
ということよりも, 旧約聖書のように別の観点か
ら全体的な人間の姿を現している。

このようなパウロの人間論的用語の中, からだ
はパウロにおいて人間の存在を特徴づける最も包
括的な概念であり (Bultmann, 1954: 187-188), 彼
は使った様々な人間論的用語の中で, 特に神学的
な意味を付与して用いた。Jang (1982) によると,

からだは人間自身の能力を信頼し依存する人間を描写する言葉とし、『肉について』という表現を使うが、『からだについて』とは表現をしない。また、肉の復活については言及せずからだの復活について言及し、からだはキリスト人の復活を描写する（コリント人への手紙一15：44、ローマ人への手紙8：11）。

パウロは、からだを単に人間に付いているもの、ギリシャ思想から出る霊の墓や監獄、またはコリント教会の人々のように、からだを低俗なこの世界的なものとして考えなかった（Bornkamm, 1969：130）。すなわち、人間は二つの本性、つまり身体と非物質的な魂を持つということは事実であるが、霊がからだより優れているとか、グノーシス派（Gnostics）や新プラトン主義のように、霊は善良でありからだは不道德であるという思想に逆説を唱えた。かえって「私たちは生ける神の宮なのです」（コリント人の手紙二6：16）と語った。からだと霊は、分離が不可能な一つの実体とし、からだや霊、そして魂は一人の人間全体に置いて理解される各々方向性の異なる表現であるということだけのことであった。

人間がからだを持っているのではなく、からだ自体という話は、全体的に統一されて生きている有機体であり、人格として、そして、特に行動する主体と同時に、行動をかけることができる対象としての人間を意味することである（Fitzmyer, 1990：109-110）。ここで、からだ自体は、あらゆる善なるものも不道德なものもなく、関係の中では、正しくなることも誤ることも、自分自身一つになることも亀裂を起こすこともできる、色々な可能性を持つ（Bultmann, 1954: 191-195）。それにより、からだは、肉と同意語にも使われることができるのである。したがって、からだは肯定的な側面と否定的な側面を同時に持つようになる。

肉は腐敗し死ぬほかはない人間ならば、からだはそれを離れては存在することのできない人間の存在様態である。コリント人への手紙一13：3「…自分のからだを焼かれるために渡しても…」、そして、ローマ人への手紙12：1「…あなたがたのからだを神に喜ばれる生きた聖なる供え物として

ささげなさい…」とする時、からだは全体の一部分ではなく、生活と活動全部を含んだ人間自体を意味する（Ko, 1987: 263）。また、フィリピン人への手紙1：20「…生きるにも死ぬにもわたしの身によってキリストがあがめられることである」という時、からだは単に外的身体的側面での人間だけでなく『全人』を意味する（Jang, 1982; Kim & Hwang, 1993）。

Van Dalen & Bennett（加藤橋夫訳、1976：99）によると、新約聖書では『soma』という言葉が肉体（body）と翻訳されているが、パウロはこれを、個性・全人と現す言葉で使っている。ギリシャ後期の哲学で『psyche』という言葉は、人間の高尚で非物質的な不死の部分の意味し、低俗で物質的な肉体（soma）に対するものであった。しかし、新約聖書の『psyche』はヘブライ語で霊（soul）-生物・全人-に該当する言葉と同じ意味である。新約聖書において『肉体（flesh）』と『精神（spirit）』と翻訳される言葉は、人間が持っている対立する二種類の性質というよりも、他の種類の人間を意味するというものである。聖書の見解では人間は二元的存在ではなく一つの統一体、全体的存在であり、それが『精神的な生活方式』または、『肉体的な生活方式』のどちら側かを選択するということであった。

このように、パウロによる霊に対する概念は、人間の全体性を総合的に表す二元論的分離の概念でなく、聖霊による人生のキリスト教的な独特の経験が、彼の人間学的な基本位置を占めるが、これは肉的なことに反して、神霊的で霊的な人格的で又自分の認識、特定の意志の方向を述べている。

人間は霊であり、霊を所有し、『私』自身を指し示すのに使うことができる。また、霊は人間の真の内的自我として、自我を知り意志のとおり行う自意識としての人間を表現する（コリント人への手紙一6：18、コリント人への手紙二2：13、7：13、12：18）こととして、内的生命を意味する。更に一歩進み、パウロの人間論におけるの霊とは、神様の霊との交わりが可能な部分であると同時に、腐敗したり墮落する可能性を持つのだが、この霊の事後状態は、特別な聖書の言及がないた

め、簡単に推論することができない。

結局、旧約聖書と新約聖書の中で、からだ、霊、魂、肉等の言葉を、聖書解析学的に検討した結果、人間は二元的な存在ではなく、むしろ、一元的存在ということが明確になった。精神-肉体または、肉体-霊という、人間に対する二元的見解は、東洋およびギリシャ後期哲学の所産であった。前で明らかにした通り、旧約聖書の中で『身体 (body)』という言葉を変えることができるヘブライ語は、どこにもない。英語で『soul』と翻訳しているヘブライ語は、人間の精神・肉体的統合体 (psycho-physical totality)、すなわち人間全体を意味する。

5. 結論

冒頭で明らかにした通り、人間の身体観において、心身の概念が一元論か、あるいは二元論かによって、身体活動を手段とする体育に、大きな影響を与えることになる。すなわち、心身一元論では精神と身体の発達を一つの有機的な関係として説明するが、心身二元論では身体的な発達だけを主とした体育の姿が形成されなければならないためである。

ところで、身体と精神を異なると考えるようになったのは、キリスト教的、禁欲主義的傾向が現れたためであると誤解されている場合が多い。それは身体を蔑視し、精神のより下位と見え、教育は精神を根源に置かなければならないと信じられ、長期の間そのような傾向の中で、教育観は形成されたためである。Williams (1964) が指摘したように、そのような様々な活動が明確で具体的であると、そのプログラムを単に身体的意味とだけ考えたことは、従来の体育の不幸な習性であった。

精神と身体が二つの分離した実体と考えられた頃は、体育は明らかに身体の教育であり、これと同じように、精神の教育もやはり精神面だけを要求した。しかし、身体と精神に関する哲学的考察、精神身体医学などの発達には、精神と身体を分離した実体と考えることを認めず、一個人の全体性が顕著な事実という人間本性の理解によって、『体

育の教育』から『体育は身体を通じた教育』という考えに至ったのである。

人間は本来、心身が一体であり、精神と身体は、別の実体と考えることができず、また、人間の全体性、すなわち人間の活動が一面的・局部的であるとは言っても、常に一個人の全体的な反応であり、その活動は一個人の全体に影響を及ぼすということが、今日の一般的な観念である。したがって、体育は全人教育であると言えるのである。

ところで、今まで考察したところによると、プラトンとアリストテレスなど、ギリシャの哲学者達を中心にしたヘレニズムの身体観は、心身をそれぞれ別のものと見なし、身体より精神を重視する心身二元論的な思想であったのに対して、新旧約聖書での被造物である人間は、人間論的な用語で見られるヘブライズムの身体観において、明確に身体と精神は分離不可能な心身一元論的思想であった。これは、体育の歴史で派手だったヘレニズムよりも、むしろ、まればだったヘブライズムの身体観に、『『精神—肉体的生活 (Psycho-Physische Leben)』の本来一つである』という現代の哲学的人間学の身体観が含まれる。それ故、現代体育の指標とならなければいけないのであろう。

参考文献

- Baab, O. J., Park, D. S. 訳 (1986). 『旧約聖書神学』。ソウル：大韓基督教書会。
- Bronkamm, G. (1969). Paul. London: Hodder and Stoughton.
- Bultman, R. (1954). *Theology of the New Testament*. trans. K. Grobel, Vol. 1, 2. New York: Charles Scribner's son.
- Eichrodt, W. (1967). *Theology of the Old Testament*, Vol. 2. Philadelphia: The Westminster Press.
- Fitzmyer, J. A., Kim, S. B. 訳 (1990). 『パウロの神学』。倭館：ブンド出版社。
- Jang, S. (1982). 「パウロの人間理解に対する研究」、『ブルビツ教会』12。
- Jang, S. (1983). 「新約聖書でのヘブライズムとヘレニズムの現象」、『延世大学校延神院牧師夏期神学セミナー講義集』, No. 3. 180-196.
- ジェジャウエン編 (1991). 『グランド総合注釈1』。ソウル：聖書教材刊行社。
- Jokl, E. (1977). 『The Genius of St. Paul』, *History of Physical Education and Sports*. Tokyo: Kodansha.

- Jung, J. H. 他 (1990). 「西洋身体思想に関する研究」. 『東亜大学校附設スポーツ科学研究論集』 9.
- Jung, U. G. (1990). 「メルロ＝ポンティの認識主義的身体が持つ体育の意義」. ソウル大学校博士学位論文.
- Han, D. G. (2003). 「ヘレニズムがユダヤ文化に及ぼした影響」. 『現象と認識』 Vol. 27, No. 4, 141-160.
- 川村英男 (1988). 『改訂体育原理』. 東京: 杏林書院.
- 基督教大百科事典編纂委員会 (1985). 『基督教大百科事典 12』. ソウル: キリスト教文社.
- Kim, C. (1982). 「アリストテレスの身体観研究」. 『韓国体育学会誌』 21-1.
- Kim, D. S. & Kim, Y. H. (1990). 『体育哲学』. ソウル: 図書出版ナナム.
- Kim, J. S. & Hwang, S. W. (1993). 「中世基督教身体観と聖書身体観の文献的考察」. 『忠北大学校平生体育研究所論文集』 6.
- Ko, Y. M. (1987). 『聖書原語大辞典』. ソウル: 基督教文社.
- Lee, D. G. & H. J. H. (2009). 『スポーツ哲学』. 釜山: 東亜大学校出版部.
- Lee, G. W. (1984). 「パウロの人間観とその旧約的背景に関する研究」. サムユク大学校修士学位論文.
- Lee, R. H. (1985). 『GREECE 体育思想史研究』. ソウル: 蛍雪出版社.
- Lim, H. O. (2008). 『西洋文明のアイデンティティ』. ソウル: 図書出版グリシム.
- 水野忠文 他 (1973). 『体育教育の原理』. 東京: 東京大学出版部.
- 日本聖書協会 (2001). 『聖書』.
- Rappaport, B. S. (1975). 「Carnal Knowledge: What the Wisdom of the Body has the Offer Psychotherapy」. *Humanistic Psychology*, Vol. 15, No. 1.
- Robinson, J. A. T. (1952). *The Body, A Study in Pauline Theology*. London: SCM Press.
- 篠田基行 (1973). 『體育思想史』. 東京: 逍遙書院.
- Son, D. H. (1986). 『キリスト教会史 (I)』. ソウル: 総神大出版部.
- Van Dalen, D. B. & Bennett, B. L. (1971). *A World History of Physical Education*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, Inc. 加藤橘夫譯 (1976). 『新版體育の世界史』. 東京: ベースボール・マガジン社.
- Williams, J. F. (1964). *The Principles of Physical Education (8th ed)*. W. B. Saunders Co.
- Wolf, H. W. (1974). *Anthropology of the Old Testament*. Philadelphia: Fortress Press.

- 使役を称する。私たちはその創造されたものを利用して何かを作るだけである。
- ③ 神の創造行為にだけ使って、神様自身が創造行為の主体であることを現わす。

〔注〕

1) bara (בָּרָא, 創造)

- ① 語義: 『切る』すなわち『切って作る』で創世記 2:7 に『土で作って』あるいは土で『切り出した』である。
- ② 意: 無から有を作った神様の行動, すなわち何も無いところから天地万物をあるようにした神様の